

は決して食べないのです。親の與へるもの、外は決して食べません。小さい時から含嗽をさせたり齒をみがさせたりしてありました。それから、病氣の時に困るといふので、吸入もならはせてあつたのです。それで、多くの場合全快がむづかしと

いはれて居る疫痢病にかゝつても、非常に早くなほりました。快方に向つてから後の養生法など非常にむづかしいのですが、極めて容易に之を實行する事が出来たのでした。

保 育 入 門 (五)

倉 橋 惣 三

五、幼稚園教育の顧慮

幼稚園教育が不斷に顧慮しなければならぬことは、

缺くべからざる顧慮なのである。

- 一、身體の健全なる發達
- 二、神經系統の養護
- 三、個性の保存

- 一、身體の健全なる發達

の三つである。但し此の三つの顧慮は必ずしも幼稚園教育に限らず、すべての教育に通じて必要のことであるけれども、幼稚園教育に於ても、特に

幼兒の身體は一方に於ては非常に盛なる發達力を有して居るが、また一方に於ては、骨格筋肉等の發達が未だ充分に完成して居ないために、種々なる發達障礙を被り易い。發達力の盛であるといふ方からいへば、之れを存分に助成して、一ぱいの發達を遂げしめなければならぬ。又、發達障

碍を破り易いといふ方からいへば、年齢の進んだもの殊に成人などに對するよりは一層細密なる注意を用ゐて些少にても身體の健全なる發達を害する如きことは、之れを避けなければならぬ。いづれより見るも、幼兒期の身體に關する顧慮は特別に必要である。

但し、身體の健全なる發達に最も積極的責任を有するものは家庭であつて、第一に必要な營養の如き、睡眠の如き、衣服の如き、所謂生活の中心に關することは、直接に幼稚園の責任とする處でなく、又幼稚園自らが如何ともなし得べからざる範圍に屬することである。勿論、萬一之等の點に就て甚しく注意の缺けて居る家庭があつた場合には、幼稚園は其の教育上の權威と親切とから、懇に家庭に教へ又其の注意を促し進むべきである。假令ば、衣服の清潔に就て、或は帽子靴等の注意に就て、或は辨當に關する注意等に就て、幼稚園は其の心づいた點を怠ることなく家庭に通告しなけ

ればならない。しかも之等の注意と共に、幼稚園自らの任務に屬する顧慮に就て、充分に周到でなければならぬ。設備上の衛生的顧慮は勿論、在園中の幼兒の生活をして、聊かたりとも健康に害のある如きことなからしめ、また最も適切なる種類と程度とに於て、其の發達を増進せしむる様になければならない。

世には、幼稚園の教育の全體を體育上の利益以外に出でないもの位に考へて居る説もある様であるが、それは言ふまでもなく到らざるの論である。幼稚園は幼兒の身體以外に、尙ほなすべき、又なし得べき他の目的を有して居るものである。しかし、他の如何なる貴重なる目的と雖も、幼兒の身體の健全なる發達を一毫たりとも犠牲にするの權はないのである。

二、神經系統の養護

身體の健全なる發達は、常に精神生活の上に大いなる影響を有するものであるが、精神生活の健

全不健全の上に最直接なる基礎的關係を有するものは、神經系統の健全といふことである。一度び神經系統が障礙を被つて薄弱なものになると、其の感情も不健全になる。意志も不健全になる、言ひかゆれば性格全體が薄弱になり甚しきは病的になる。身體の虚弱も最も憂ふべきことであるが、神經の薄弱は一層憂ふべきことである。

然るに幼兒期は其の神經系統の發達が未だ充分堅固でない爲に、一寸したことによつて障礙を受け易い。餘りに長い時間無理な注意の聚注を強めたり、餘りに度の強い刺戟を與へて過度の興奮をさせたり、餘りに精巧細緻なる手技等を課して小筋肉に疲勞を與へたりする様の類のことは、いづれも其の軟弱なる神經系統に障礙を與へ易い。茲に大いなる顧慮の必要を生ずるのである。蓋し、幼稚園が他の方面に於て如何に多くの顯著なる教育の成果を誇り得るとしても、若しそれがために幼兒の神經系統の養護者を害して居る。如きこと

があらば、それは實にゆゝしき大事と言はざるを得ない。何となれば、其の結果は其の幼兒の全性格全生涯の上に及び、また國民生活の將來に大いなる影響を與へるからである。

但し、神經系統の養護も、身體と同じく、顧慮に過ぐるは却つて其の強健なる發達を得ないことになるので、適當なる鍛鍊の必要あるは言を俟たない。しかも實際に於ては、成人の發達せる神經を標準とし易い結果、鍛鍊の足らざるよりも過ぐる方が多いのである。即ち常に之れを顧慮しなればならない。

三、個性の保存

以上二つの顧慮とは少しく方面を異にすることであるが教育上の一個の理想標準を以て幼兒の生活を劃一ならしめ、妄に個性の特長を失はしむる如きことも、次に顧慮すべき要點である。素より幼兒の中には多少望ましからざる性格を有するものが無いでもない。之れ等に對しては、幼稚園教

育の相當なる範圍に於て之れを教化矯正することは必要である。しかも、教育の點の成功は多くの兒童を同一型に入らしむるのではなくして其の各自の個性の充分なる又正しき發揮にある。殊に幼兒教育に於て左様である。

尤も幼稚園時代は未だ個性の形成の充分確固なる時期ではない。個性の保存といふことを以て、幼稚園教育に於て個性を確立せしむるといふことに誤解されてはならない。茲にいふ意味は決してそこ迄積極的な個性發揮をいふのではない。たゞ消極的に個性壓迫、乃至個性消滅をしない様に顧慮すべきことをいふのである。しかも此ことたるや大に必要なことである。

○幼稚園兒童の食事に就て

長濱 宗 信 氏

大阪市の幼稚園では、兒童がお辨當を食ふ時に、早くお上がり早くお上がりと急がして、兒童が辨當を少し許り食はうが皆んな食はふが、そんな事には無頓著であると云ふ様な扱ひ方をする先生と。お辨當は皆んな食て仕舞ふ様に仕向ける先生とがあります。此の辨當を食ふ事を急がす方では、時とすると、兒童等にお辨當の早や食を競争せしむる事となつて、誠に宜くないから、兒童がお辨當を食ふ時には受持先生は急がさないで、食物は能く咀嚼して、お辨當は皆んな食つて仕舞ふ様に仕向て貰ひたい。又大阪では子供を愛し過ぎて、既に七八歳になつて居ても其食事の時には、他から手傳てやる事が能くあります。斯んな育て方をして居る家の子供は、意氣地がなくて、何時まで経つても、上手に食事をする事が出来ないから。兒童がお辨當を食ふ時には、受持先生は能く氣を附て、上手に食ふ事の出来ない者には、其家庭にも注意し、又其兒童が上手にお辨當を食ふ様に、親切に饜けて貰ひたいと云ふのが、幼稚園の先生達に對する私の希望であります。

獨り幼稚園のみではなく、各家庭に於ても、子供が食事する時には、急がさないで、食物は能く咀嚼して食ふ様に仕向て貰ひたい、又た子供が五六歳になれば、成るべく手傳はないで、獨りて食事をする様に、饜けて貰ひたいと云ふのが私のお話の要點であります。(『兒童研究』第十七卷第十一號所載)